

パネル討論：報道されない戦争の実相

## 歴史に見る戦争報道

福田 昭典 ノーモア南京の会

### 1. はじめに

今、私たちは歴史から何を学ぶべきか、ということ大きなテーマとして、このパネルディスカッションを行っていきたいと思います。私は1988年位から中国人強制連行の問題に関わるようになりました。かれこれ15年間、日本の侵略戦争の残した歴史の遺留問題に関わってきたわけです。この南京大虐殺の問題に関しては、「ノーモア南京の会」が活動を始めた当初、1996年から関わってきました。当初、私が歴史の問題に関わりだして感じていたことは、この歴史の中に日本の将来、日本の今後にとって非常に大きな教訓があると、この歴史の問題の中から大きな教訓を汲み取って、なんとか日本の、日本とアジアの将来に生かしていきたい。そのような問題意識でずっと関わってきました。どちらかというと集まってくる人間も、強制連行の問題とか性暴力被害者の賠償請求問題とか、いわゆる戦後補償の問題に関わっているというような人たち、一概には言えないけれども、歴史の問題に関心を持っている人たちが非常に多く、どちらかと言うと、高齢・中



年以上の方が関心を持っていて、ある意味では、老体に鞭を打ちながら活動しているのではないかと私は考えています。

ところが、小泉政権が出来てから、歴史の問題が単なる歴史の問題ではなくなりつつある。ブッシュ政権ができて、アメリカの新保守派といわれる、いわゆるネオコングループといわれる人たちが跋扈するようになり、それと連動するような形で小泉が大手を振って動き始めた。この1、2年の間に、歴史の問題というのが、歴史の問題だけではなくて、まさに現実の問題になりつつある。歴史の間

題と現実の問題が表裏になりつつある。私たちが今まで学んできた、歴史が残した様々な教訓を、今この瞬間に生かそうとする営為がなかったら、もうとんでもないことになる。要するに、歴史のフィルターを通して現在を見ていく、歴史から学び取ったものを基礎にして、日本の現在と将来を見ていくということを早急にやっけて行かないと、とんでもない方向に進められていく。もう既に進められつつある、そういう危機感を強く感じるわけです。私は、様々な危機をアジって、どうこうしなければいけないという、政治的主張をするのはあまり好きではないですけど、そんなことを言っていられないほど、日本は危機的な状況になってきている。今まさに平和憲法を蹂躪して、自衛隊がイラクに戦争をしに行くという状況を前にして、私どもが歴史から学んできたことをできるだけ多くの人々に是非とも伝えて行かなければならない、そういう思いに駆られています。

## 2. 戦場の実相 — 新聞の従軍記事と石川達三の「生きている兵隊」

一言で言うと、日本人は歴史から何も学んでいない。例えば、今日配った資料のなかに、過去の日本の新聞記事が載っていると思います。「広安門の死闘」という記事がありますが、これは1937年に東京朝日新聞の記者が従軍して、北京の近郊の広安門を攻めのぼっていくというドキュメントです（昭和12年7月28日、東京朝日）[1]。「広安門の死闘」、これは凄まじいですね。新聞記者

がまさに軍人と一体となって記事を書いています。それと「斬ったり敵六百」という見出しの記事があります。これは東京朝日新聞の記事です（昭和12年9月23日）[2]。

「斬ったり敵六百、安田部隊長血達磨」、こういう類の記事が堂々と新聞に載っていました。次は「支那兵廿名西瓜斬り」、「上海陣の『宮本武蔵』」、これも東京朝日新聞の記事（昭和12年9月22日）です[3]。資料のその裏面の記事は、「百人斬り競争」です。これは東京日々新聞（昭和12年12月13日）、今の毎日新聞です[4]。こんな下劣な記事が日本の紙面を飾っていたんです。これはまさに、中国人に対する蔑視観だとか、中国人に対する敵愾心とか、中国人なんか殺してもいいという一種のイデオロギー、それをどんどん日本の民衆に注入していった記事なんです。これらは1937年の記事です。これ以降も中国戦線に動員された兵士たちはたくさんいましたが、彼等はどういう思いで中国戦線に行ったのでしょうか。こういう下劣な記事を読んで、中国人は殺してもかまわないんだという思いで、中国戦線に行ったわけです。そして歴史が教えるように、その通りに中国人を殺していった。ところが、このこと（新聞の戦争責任）の総括が日本のジャーナリストに全くありません。

この1937年の日本軍の蛮行をしっかりと日本の民衆に伝えなければならぬと考えたのは、ただ一人、石川達三です。彼は1938年の1月から南京に行きました。南京ではまだ残敵掃蕩作戦というのが継続されていま

した。彼自身が南京で見たもの、南京で取材した日本の軍人たちに聞いた話、彼等がどんなことをしたのかを聞いた時、彼は、それをどんなことがあっても伝えなければいけない、今戦場で何が起きているのかということをも日本の民衆に伝えなければいけないと、真剣に思ったんです。それで、1938年2月末に「生きている兵隊」を雑誌『中央公論』に出します。もちろん即刻出版停止です。裁判にかけられたり、いろんな困難にありました。中央公論が出版したわけですから中央公論も裁判にかけられた。中央公論の編集長がクビになったりといろんなことがありました。1945年、日本が敗戦を迎えると、早速「生きている兵隊」は、中央公論から再出版されます。ところが、それ以外の日本のジャーナリストからは、何の総括もない。なぜでしょうか、非常に不思議です。

### 3. メディアが煽った戦争

例えば、戦争というのは、ある日突然戦争が起こるわけではないですね。日本の中国侵略にしても、ある日突然起こったわけではない。いろんな蓄積があって、ひとつひとつの積み重ねのなかで、1937年の7・7を迎えるわけです。それを、私たちは繰り返してはいけないわけですね。繰り返さないためには何をしたらいいだろうか、それを考えるとしたらそれは歴史にしかその鍵はない、というふうに思います。

私は歴史家ではないですけど、私なりにいろいろ勉強をして思うことはお話ししたいと思

います。例えば、日清・日露の戦争からずっと話しをしていきますと、日露戦争の時はまだ、反戦論や非戦論が公然と新聞紙上を賑わしていました。万朝報（よろずちょうほう）という新聞社があって、東京朝日新聞と万朝報が、当時の日本の新聞の双璧だったんです。万朝報は、反戦論をどんどん載せていました。幸徳秋水や堺利彦といった人たちが、堂々と反戦論を書いていた。だけど、彼等は逮捕されるわけではなかった。しかしながら、最終的には万朝報も開戦論に屈服していきます。反戦論のために弾圧されたわけではないです。自分たちがそういう選択をしたんです。そういうことの積み重ねで、日本のファシズムは形成されて行った。

日露戦争では日本は相当悲惨な戦争をやるわけです。ロシアは強かったんですね。旅順港の戦いなんて相当悲惨です。22万人の日本人が奉天まで行くわけですけど、大変な数の人たちが死傷します。しかし、この間メディアでも、与謝野晶子の、弟を想った詩だとかが新聞に載った。そんなに悲惨な戦争が行われているのか、という記事が新聞に載っていました。ところが、日本海海戦でバルチック艦隊を日本の海軍が打ち破ったとたん、ものすごい勢いで戦争はすばらしいという展開が出てきます。結局、日露戦争では日本はロシアから賠償をとれなかった。言ってしまうえば、賠償交渉を有利に進めるために戦争を継続する経済的、財政的余裕が日本になかった。そうしたら今度は、こんな和平条約を結ぶなど、新聞が煽りたてるんです。メディアが排

外主義を煽って、メディアが戦争を作っていくんです。その結果、何が起きたかという、和平反対を叫ぶ群衆が起こした「日比谷暴動」です。暴動後も、「日比谷暴動」は正しい、政府が間違っている、弾圧は間違っていると、バーッと煽ったのも、やはりメディアでした。メディアは、どんどんエスカレートしていくんです。

\*

また話しは違いますが、1937年、日本は蘆溝橋事件をきっかけにして、全面的な中国侵略をして行くわけです、さっき上海記念館の陳賢明先生が話された1937年8月13日、第二次上海事件というのが起こります。日本の軍人が殺され、それが、ワッと日本の新聞にのるわけです。日本軍人が殺された、開戦だ、戦争遂行だ、とメディアがワッと煽っていく。日本は上海で戦え、ということになるわけです。1937年の8月14日ですが、東京日々新聞が社説を載せた。どういう社説かという、**「南京に攻め上げろ」**という社説です。南京を攻めろという社説を載せました。その当時は、まだ日本軍は不拡大方針です。しかし、その時にメディアが南京を攻めろということを平気で言っていく。それで世論を作っていく。考えてみますと、メディアというのは戦争が好きなんです。今度のイラク戦争の時もそうです、メディアの間は、戦争だと言えば、血沸き肉躍るんです。なぜかと言うと、戦争はメディアにとって最大のビッグビジネスなんです。戦争記事を載せると新聞の読者が圧倒的に増えるんです。

そういうことがメディアのDNAの中に先天的に組み込まれていて、だからメディアは戦争が大好きなんです。

#### 4. だまされない「個の確立」を

僕らはメディアをあてにしてはいけません。メディアはどんどんそういうふうに戦争を煽っていく、排外主義を煽っていくんです。どうしたらいいのかと言ったら、僕らひとりひとりがしっかりするしかないんです、賢くなるしかないです。しっかり歴史から学んで、どういことがこの先あり得るのか、日本の自衛隊がイラクに行くと、イラク人のゲリラに殺されるということも充分あり得ます。今のアメリカ兵みたいに、けっこう残忍に殺されるかもしれない。イラクの民衆に殺されるかもしれない、そういうことがあり得るわけです。1937年の上海の例をみても、その時に日本のメディアがどういう報道をするのか目に見えている。だけど、その時に私たちは騙されてはいけません。なんであんなところに自衛隊が行っているのか、それが問題の本質です。アメリカがイラク戦争に巻き込んで、イラク戦争はアメリカのマッチポンプです。戦争の原因をアメリカが作って、アメリカが戦争をしている、そんなことはわかっているんです。だから僕ら自身が、ひとりひとりの個の確立が大切です。強い意思、そう言うものをしっかり持っていないと、今の平和憲法が無残にも蹂躪されていって、日本が軍事国家になってしまう、そういうことを阻止できないだろうと思います。



[資料 2]

# 斬つたり敵六百

## 安田部隊長等血達磨

〔大岡屋二十三日同前〕 二十一日午後、大岡屋の敵軍に於ける我が兵隊の活躍こそは、今次軍中における最も自衛しい射血の一つとして記されてゐる。中央軍中、敵軍を撃つた八日の敵兵は、大岡屋の理屈な戦場に居り、退却する我が○部隊に、我が軍の退却を阻まんと必死に

### 抵抗

ながら大岡屋の戦跡跡りを見せてゐた。我が別隊は、敵軍○メートルの地盤に敵軍頭を置いて、物を活用して猛射を加へたが、敵も呼んで、猛射を繰り返して、敵軍の態勢がとられた。この時、敵軍、四方に一陣の風が上つて、敵軍の隊形は見る／＼内に散

大して、敵軍の如く、敵軍がけて、突進して行く。これぞ我が安田部隊の敵の陣を突いた前線だ。士魂の

先鋒には安田部隊自ら軍刀を抜、突進して行く。これはな

ル地上に、敵軍を軍刀の柄は、杖の

敵軍は、この勇み果敢の突進に、敵軍は、どつと倒れ立つ。大岡屋は、今は、潰走する暇なく、敵軍、小隊を、首を、切つ、その、軍刀を、物ともせず、敵軍の、馬に、しがみつ、人、倒つ、け、目、撃、つ、て、敵に、ワツと、ばかりに、敵軍に、踏み、込んだ。安田部隊長は、勇、躍り、一、尺、五、寸、の、日、本、刀、を、打、振、り、打、振、り、響、を、幸、ひ、斬、り、まく、れ、ば、廣、く、將、兵、も、精、神、無、限、に、敵、軍、を、敵、け、斬、り、つ、け、敵、は、馬、蹄、に、敵、兵、を、敵、

敵ら子、岡屋の、如き我が、敵軍の、馬、に、さし、もの、敵、軍、と、至、極、に、敵、軍、の、退、却、せ、る、光、景、に、大、百、余、の、敵、軍、は、交、互、に、血、河、と、化、し、我、が、敵、軍、は、僅、か、に、十、余、名、に、過、ぎ、な、かつ、た、が、余、將、兵、も、恐、く、敵、の、逆、り、血、を、浴、び、て、血、染、む、有、様、で、は、敵、軍、西、に、傾、く、は、つ、つ、と、一、思、つ、て、血、染、む、た、る、軍、刀、を、敵、軍、將、士、の、衣、に、穿、透、し、て、敵、軍、の、死、で、あ、つ、た。

# 支那兵廿名西瓜斬り

## 上海陣の宮本武藏

【上海にて高橋特派員二十一日發】

我が東部右近海陸軍部隊は十九日午



後から二十日拂曉にか  
けて我に十數倍する敵  
軍と猛突を敢行す。我  
てこれを撃退したが十  
九日夕刻の戦闘におい  
て敵の正房兵、便衣隊

の中に陥り込み血しよきを浴びて敵の頭を四つ割れ又十六名をなす倒した二勇士の奮闘りが陣中の防壁となつてゐる(實蹟は後井(上) 却の勇闘者——大朝雄)

築田部隊の頭兵、副頭兵がそれ  
れんく二手に分れ部下數名づつ引  
串して陣前敵に近づく突進  
六名家 と思はれた民家の庭  
から敵十名の便衣隊が次々にピス  
トルを持つて突進して来た。その  
中に敵名の正房兵も臨つて突進し  
てゐる「何を小娘な」とばかり副  
頭兵は部下を庇護して猛突す  
る、勇敵無比の我が兵士は片づ  
から敵兵を引倒して来る副頭兵

は勇敵にも陣中に陥り込んで日本  
刀を抜き放つて斬つてく斬りま  
くる、斯くて副頭兵は敵の頭  
を四つ割れ、副頭兵は斬りも斬  
つたり十八人をなす倒した、二十  
一日朝築田部隊を奪われと丁度敵  
兵、副頭兵が敵前隊の頭  
を伸ばく血んで一休みしてゐる所  
だ、副頭兵は斬りを見せ  
てくれた

氷の やうな日本刀にはま

だ生々しい血がついてゐる、副兵  
曹長の袴も無敵であるが崩落の

築物だ、十六名を斬つたといふの  
に二ヶ所の刃とほれもない。  
支那兵なんてまるで大根が鯨の  
やうなものさ、しくら斬つたつ  
てちつとも手離へがない、この  
副子だと頭が割れ、まで百人以上  
は築に斬つて見せるぞ  
副頭兵は突進に突ひ立上つて母  
び前敵に斬つた





パネル討論：報道されない戦争の実相

## メディアの変貌

増子 義久（ジャーナリスト）

こんにちは、増子です。今、福田さんからさんざん批判された”翼賛新聞”の朝日新聞にいました（笑）。三年前に定年退社し、今は故郷の花巻（岩手県）に住んでいます。差別的な表現ですが、”日本のチベット”といわれてきた岩手の地から、東京やイラクあるいはアフガンを眺めていると、非常によく物事が見えてくる。というわけで、岩手の地から見える風景というんですか、そういうことを少しお話できればと思っています。

### 「愛国行進曲」の時代

先ほど、叶林根さんと陳賢明さんから、血も凍るような上海、あるいは南京のお話がありました。66年前の当時、中国から遠く離れたこの日本では一体、どういう光景が展開されていたのかということを僕は考えてみたいんです。南京事件（1937年）は僕が生まれる3年前の出来事ですが、当時ちょうど、近衛内閣が「国民精神総動員運動」というのを手がけていた時期です。花巻は宮沢賢治が生まれた所ですけども、「賢治の広場」という展示場があって、そこに賢治に因んだ、



色んなものが並べてあります。その中に戦前の写真が飾ってあるんです。やぶ屋というそば屋、賢治も大好きだったというそば屋があるんですけど、南京事件の直後に撮影したのと思われる写真があります。店頭に「祝南京陥落」と書かれたのぼりを掲げた図柄です。その横に、これも今も続いている古物問屋ですが、店員が着飾って、ニコニコ笑っている写真があります。写真説明は廃品報国。廃品を集めて国に報いようというわけです。ここで、僕が言いたいのは、これらの写真が違和感なく今という時代に溶け込んでいるのではないか。66年前の風景が今も生きているの

ではないかということなんです。いや、66年前よりもむしろ今の方が相当やばい状況ではないか。そんな気さえます。

当時ひとつの歌がおそらく全国を席卷していました。僕が生まれる3年前、つまり南京事件の時にできた歌ですが、僕も歌詞を覚えています。1937年の12月に発売された「愛国行進曲」です。歌いだしは「見よ、東海の空明けて…」です。お年寄りの人はご存じだと思います。叶さんがひどい目にあってきた時、日本はこの歌で覆い尽くされていたのです。当時、100万枚売れたそうです。そして、今また「愛国行進曲」の音律が耳元に近づきつつある。国威を発揚させようという、ファシズムの時代がもう到来している。そういう時代状況だと僕は思います。

一昨日でしたか、耳でテレビを聞いていたら、聞き覚えのある声が「これはファッションだ」と怒鳴っていました。ここ東京都の知事でした。東京都の三位一体の改革に関する会議で、全国知事会が東京都を無視する考えを示した。このことに腹を立てた石原慎太郎が事もあろうに「ファッション」だと怒っているんです。これはブラックユーモアにもならない。ファシストが相手を「フファシストだ」と言って罵倒しているのですから。あの人物は確信犯だから今までも「問題発言」を繰り返していますけれども、最近度は過ぎますね。外交官が二人殺害された時もすごい。「自衛隊でどうどうと殲滅すればいいじゃないか、日本軍は強いんだから」と。「拉致問題」の折衝に当たっている田中さんという外務省

の高官の自宅に爆発物が仕掛けられた時も「当たり前じゃないか」と言うわけでしょう。これまで、問題発言した閣僚というのはなんとなく恥ずかしげに退場していったものです。この人物は例外で、言えば言うほど元気になっている。どうしてこんな男が圧倒的な人気を誇っているのか。田舎から見ていると本当に不思議な光景です。どうしてリコール運動が起きないのでしょうか。罷免運動がどうして起きないのか。東京は何か腑抜けみたくになっている。とても心配です。

この3年間の間に色んな法律ができてしまった。有事3法とかイラク特措法とかがあったという間にできてしまった。というより、結果としてそれを許してしまった。承認してしまったというしかない。抵抗運動がないも同然なのですから。「たかが」と言うと怒られそうですが、「たかが60年安保闘争」の時でさえ、国会周辺には毎日何十万人もの人波が押し寄せていた。今はみんなどこで何をやってるんでしょう。実に不気味です。石原慎太郎という人物は作家を自称していますが、こんなに言葉を乱暴に使う作家っているんでしょうか。言ってみれば、言葉を蹂躪している、あるいは冒瀆している。平たく言えば、言葉を舐めている。考えてみると、「平和」とか「正義」とか「自由」という言葉は「9.11」以降、戦争する側（例えば、ブッシュ大統領）の常套句になってしまった。言葉の収奪は目を覆うばかりです。「言葉の奪還」が急務です。嬉々としているあの男の顔を見ると不愉快になります。1日も早く罷

免していただきたい。よろしくお願いします  
(笑)。

## 歴史に学ぶこと 拉致と征伐

唐突ですが、歴史に学ぶということで紹介したいことがあります。秋田県の田沢湖町というところに、もう半世紀も続いている「わらび座」という“田舎劇団”があります。その劇団の「つばめ」というミュージカルが今、全国公演中です。どういう物語かというのと、“朝鮮征伐”と朝鮮通信使を題材にしたミュージカルで、演出・脚本はジェームス三木さんです。彼がこの脚本を手がけたのは2001年の4月。同時多発テロとか、北朝鮮による「拉致事件」という政治状況が起きる前に、これをミュージカルに仕立てていたわけです。

“朝鮮征伐”というのは、豊臣秀吉が朝鮮半島に2度にわたって仕掛けた“侵略戦争”のことです。1592年の「文祿の役」と1596年の「慶長の役」の二つを指しています。教科書にも載っていますが、朝鮮半島に15万人の軍隊を派兵しています。ある文献にはこう書いてあります。「進軍の（日本軍が朝鮮半島に進軍する）先々で日本軍は田畑を荒らし、官伽（役所）、寺院、民家を問わず焼き尽くし、めぼしい財貨を奪い、刃向かう相手は兵士、農民の見境なく、殺戮の対象とした…」先ほどの叶さんや陳さんのお話しとどこか重なると思いませんか。そうです。「殺し尽くし、奪い尽くし、焼き尽くす」と

いう、あの「三光作戦」と同じなんですね。秀吉の時代にすでにその「原型」ができています。たかだか400年前の歴史ですが、そういうことを僕らはほとんど忘却しているんじゃないか。秀吉はその時、“鼻そぎ令”というのも出しています。そして、3万人の鼻を戦利品として持ち帰ったと伝えられています。京都の秀吉の豊臣霊廟の近くに「耳塚」（鼻が耳と誤伝された）があり、鼻はそこに埋められているそうです。同時に忘れてならないのはこの時、7万5千人の婦女子を強制連行しているということです。要するに拉致です。ちょうど今の北朝鮮による「拉致事件」とオーバーラップする事件が400年前に起きていたわけです。「つばめ」の初演の1ヶ月後に「拉致事件」が平壤宣言で明らかになった。この偶然の符合に一番、驚いたのは当のジェームス三木さんです。意図したわけではないのに、余りにも酷似した「国家犯罪」が並列する形で提示されたわけですからね。

徳川時代になって「朝鮮通信使」が拉致被害者の帰国交渉のために来日します。この時のスローガンが「文をもって武に報いる」です。朝鮮は2回も侵略されたわけですが、武力で抵抗するのではなく、いわゆる「文化使節団」を送って問題の解決を図ろうとしたわけです。200年間にわたって12回も使節を送っています。このミュージカルは、歴史を相対化してみることの大切さを教えています。“朝鮮征伐”だけではなく、朝鮮の植民地化とそれに伴う「朝鮮人強制連行」などに視線を移項させることによって、今の北朝鮮

による「拉致事件」の本質も浮かび上がってくるのではないか。こうした思想の鍛錬を繰り返すことによって、例えば、「国家の酷薄さ」ということを知ることが出来る。そして、そのことが「歴史」の判断を踏み外さないことにつながっていく。そう思います。

ところで、教科書には「朝鮮出兵」と記述されていますが、はっきり「朝鮮征伐」とすべきだと思います。この点に僕は非常にこだわっているんですが、戦争というものには最低限の国際法が用意されているはずです。宣戦布告してから開戦するとか…。秀吉の時代には宣戦布告という概念はないわけですから、これはまさしく征伐そのものです。では、アフガンやイラクの場合は「戦争」でしょうか。これも僕は征伐だと思うんです。国際法なんか無視した事実上の“先制攻撃”なんですから。僕はだから「イラク戦争」という表現ではなく、「イラク征伐」と呼ぶことにしています。「征伐」という視点で眺めると、まったく別の光景が目の前に広がってくる。この「視線の移項」が、今求められていると思います。

## メディアが語らない戦争

メディアの話しに移ります。政府が自衛隊の派兵を決めた、12月10日付の朝日新聞と読売新聞の社説を読み比べてみたいと思います。読売はずばり「国民の精神が試されている」。これが見出しです。これは1937年の「国民精神総動員運動」と同じ精神構造、

みんなで頑張ろうというやつです。小泉首相も「日本人の精神、国民精神が大切だ」と絶叫している。この社説は臆面もなく、それをバックアップしている。次に、朝日ですけれども、この新聞は相当にずるいですから、注意して読まないとだまされてしまう。「日本の道を誤らせるな」が見出しです。朝日も少しは姿勢を変えたかと思って読み進んでいくと、5行目に「小泉首相、至難の決断を迫られているときだ。まして尊い人命がかかっているといればなおさらである」と出てくる。「尊い人命」の中には当然、イラク人の命も含まれると思っていたら、全然違うんです。「わが自衛隊員が死傷した時にどういう責任を取るのか。そういう危ないところに送っているのか」という論理です。最後の方には「ここでは(米英)の開戦の大義は問うまい」と書いてある。語るに落ちるとするのはこのことです。戦争の是非を問わずして一体、何を語ろうとしているのでしょうか。ただひとつ判るのは、イラクのシビリアン、非戦闘員の死者であるとか、そういうものに対する想像力が朝日の社説の中には一切ないということです。このことだけははっきりさせておかなければなりません。

新聞は報道しませんが、「語られない数字」というのがあります。CNNなどの報道によると、米軍の死者は(2003年)12月11日現在で451人だそうです。端数まではっきりしている。これに対して、イラク兵の死者は13,500人から45,000人という大雑把な数字でしか語られていない。戦

争を仕掛けた側はそもそも殺した側の数なんかに興味はないんでしょう。南京事件の時もそうでした。カウントしていない。カウントしきれないほど殺戮したという方が正確かもしれない。イラクの市民、非戦闘員に至っては、21,000人から55,000人と2倍以上の開きがある。人間の死に対するこれ以上の冒涇はあるでしょうか。

ところで、イギリス人などで組織する「イラク・ボディ・カウント」というNGOがあります。イラク人一人一人の「個死」をあらゆるデータを駆使して精査している。(2003年)10月7日現在、イラク市民の老人子供まで含めたいわゆる無辜の民の死者は、9,178人となっていました。2ヶ月後の12月7日になると、この数字が9,766

"We don't do body counts"  
General Tommy Franks, US Central Command

# IRAQ BODY COUNT

Civilians reported killed by military intervention in Iraq	
Min	Max
9018	10873

[View Database...](#)

Recently added:

Iraq Body Count  
Comment & Analysis:  
Civilian deaths in "noble"  
Iraq mission pass 10,000  
[Read More...](#) [Press Release](#)

692 named and identified victims of the war on Iraq

2004/5/5

人に跳ね上がっています。わずか2ヶ月間でざっと600人の増です。1日に15人ものイラク市民が死んでいるという数字は隠されている。全然、伝わってこない。一番、隠したがるのは当然、アメリカです。どこまで信憑性があるか分かりませんが、5月1日の戦争終結後に米軍から脱走した米兵が1,700人いるという数字もあります。これはフランスの新聞が伝えている。また、精神的におかしくなって、強制的に除隊させられた米兵が7,000人という数字も巷間で噂されている。しかし、この真相に迫ろうとするメディアはほとんどない。で、結局は何が起こっているのかという「戦争の実相」は知ることが出来ない。アメリカの新聞や日本の新聞をいくら読んでも真相は闇の中です。むしろ、熱心に読めば読むほど、都合のいい方向に誘導させられる危険すらある。だから、「イラク・ボディ・カウント」というようなNGOの情報から、真実を読みとる努力をするしかない。心底、そう思います。マスメディアに心を許すと、とんでもないことになるということです。

## 戦争に抗するために言葉の冒涇を許すな

どうも僕にはよく分からないのですが、自衛隊のイラク派兵に反対する世論が多くなっているというのは本当なんでしょうか。本当に反対しているのなら、極めつきのファシストである石原慎太郎の罷免運動が起きてもお

かしくない。むしろ、起きない方がおかしい。田舎から見ていると、どうもその辺が分からない。そうしたら、(司会の) 甲野さんから「アリバイ証明のための派兵反対という側面があるんじゃないか。ここで賛成しちゃって格好が悪いから、とりあえず反対。そんなレベルではないのか」と言われた。要するに、世間体が悪いから反対だということですね。これは相当、危ない。振り子のように、賛成と反対の間を揺れ動く危険性がある。イラクで外交官が二人殺害される事件が起きました。政府はすかさず、二人に勲章を与えましたね。「英霊」に祭り上げたわけです。国家というのは油断も隙もない。本当にすごいなと思います。その時に軌を一にして出てきたのが、あの「国民精神総動員運動」の精神なんですね。「二人の死を無駄にするな。テロに屈するな」という大合唱があつという間に全国に広がった。「アリバイ証明」のためにイラク派兵に反対してる人は下手をすると、そっちに行ってしまう危険性がある。僕はそこを危惧しています。

格好のいい話しをしましたが、実は他人事ではないという自省の気持ちもあります。石原が悪いとか、小泉が悪いとか、そういう言い方は誰にでも出来るわけです。例えば、伊丹万作という人はナチスと共同で映画を作ったこともある映画監督ですけども、彼は戦後、「戦争責任者の問題」という文章を書いています。「多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。たとえば、民間のものは軍や官にだまされたと思っているが、軍や官

の中にはいれば、みな上の方をさして、上からだまされたというだろう。すると、最後にはたった一人か二人の人間が残る勘定になるが、いくら何でも、わずか一人や二人の知恵で一億の人間がだませるものではない」と書き、こう断じています。

「だまされるものの罪は、単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにも雑作(ぞうさ)なくだまされるほど、批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまった国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである」。伊丹万作の、1946年の文章です。この言葉はそのまま、今の時代状況に当てはまるのではないのでしょうか。みんなで、真剣に語り合い、その言葉を紡ぎ集めて本物の言葉を集積していく。それが「思想」の形勢につながると思うのです。今日の集会などがその良い例だと思うのですが、伊丹万作の危惧を杞憂に終わらせるためにも、今こそこうした地道な積み重ねが必要だと思います。石原のごときに言葉を蹂躪されてたまるかという思いが、僕にはあるんです。

自分自身の反省も込めて言うと、日本人がどうしてこんなにも軟弱になったのかということ。これは僕の個人的な感じですけども、バブルというものに欲望を全開してみんなが群がった。あの時、精神的な最低限の矜持というか、人間としての誇りとか自負みたいなものをすべて手放してしまった。みんなバブルという“徒花(あだばな)”に魂を

引き抜かれてしまった。そんな感じがして仕方ありません。あれ以来、もぬけの殻みたいになって、みんなボーッとしてしまっている。そして、気が付かないうちに「愛国行進曲」の音律に足並みそろえている。当時はまだ、良くて悪くても喜怒哀楽の表情があった。今はみんな能面のような顔になっている。

戦後で、一番危険な時代に足を踏み入れている。田舎から眺めていると本当にそう感じます。

石原“好戦知事”の罷免を重ねてよろしくお願ひします。以上で終わります。まとまりのない話しになったことをお詫び申し上げます。

